

沈黙の壁に挑む

*Detective Totsugawa
Attacks The Silent Wall*



長編推理小説
Kyotaro Nishimura

西村京太郎

十津川警部

と
か
れ



光文社文庫
KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編推理小説

とつがわ
十津川警部、沈黙の壁に挑む

著者 ^{にしむらきやうたろう} 西村京太郎

1996年12月20日 初版1刷発行

発行者	森元順司
印刷	大日本印刷
製本	大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kyōtarō Nishimura 1996

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-72324-1 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

在天津
江苏工业学院图书馆

長編推理小説

と藏川警部沈黙の壁に挑む章

西村京太郎



光 文 社

十津川警部、沈黙の壁に挑む 目次

第一章	初仕事	5
第二章	弁護士	43
第三章	母 親	81
第四章	裁判に向けて	119
第五章	失われた記憶	156
第六章	二つの糸	195
第七章	第三の殺人	233
第八章	戦いへの序曲	269
第九章	解明 かいめい への旅	306
第十章	沈黙のなかでの死	344
解説	中島河太郎 なかじまかわたろう	382

第一章 初 仕 事

1

小早川京子は、手話通訳士試験に合格したのを機会に、それまで勤めていた会社を辞め、城西福祉事務所の嘱託になった。

京子の両親は、いづれも生まれつきのろうあ者だったから、手話には子供ときから、慣れていた。両親が、お互いに手話で話をしていたからである。

だが、京子は、人前での手話が恥ずかしかった。彼女が子供のころは、手話はまだ珍しくて、奇異の眼で見られることが多かったからである。

中学、高校と進み、異性を意識する年頃になると、いつそう恥ずかしさが増した。両親と一緒の外出を嫌い、やむなく出かけたりすると、わざと大声で喋った。自分が健聴者であることを、周囲に示そうとしたりした。

そんなときの、父や母の悲しげな表情を、ときどき思い出すことがある。

短大を出たあと、京子は、東京八重洲口やえすくちに本社のある鉄工会社に入社したのだが、そのときも、両親がろうあ者であることは、内緒にしていた。

何も聞かれなかったからと、自分自身には弁解していたが、もちろん、本当は、両親がろうあ者だと知られるのが、恥ずかしかったからである。

入社して、すぐ友だちができたが、京子は、自宅に連れてこなかった。両親のことも曖昧あいまいにしか話さなかったから、友だちは、変に思っていたことだろう。

入社して三年目、二十三歳のとき、上司が見合いの話を持ってきた。取引先の会社の部長の息子で、エリートコースを歩いている二十九歳の青年ということだった。

その部長が、たまたま京子の会社に来たとき、彼女を見て、息子の嫁にと考えたようだった。上役うわやくは乗り気で、しきりにすすめ、京子は肯うなづいたものの、両親のことは隠し、叔父夫婦おじと一緒にいるつもりだった。

そのとき見合いした三浦功みうら いさおという青年は、背が高く、現代風な美男子で、京子には眩まぶしかった。なぜ、自分のような、地味じみな女に好意を持ったのかわからなかったが、三浦功はつきあいたいといった。

それからの三カ月は、京子にとって、甘い恋の月日だった。三浦が運転する白いポルシェに乗って、ドライブを楽しみ、フランス料理をご馳走ちそうになり、そしてキスもした。

三浦は、自分は真剣に結婚を考えており、君の家族は、関係ないといった。君と結婚したのであって、君の家族と結婚するんじゃないからねとも、いった。

見合いのとき、京子に付き添っていった叔父が、彼女の家は、下町よまちで、小さなパン屋をやっていると話していた。

確かに、それは事実なのだが、両親がろうあ者だとは話してない。

三浦が君の家族は関係ないといったのは、資産家でなくても、という意味なのは、明らかだった。

だから、京子は、三浦が両親のことを知ったとき、どんな態度に出るか、不安だった。

耳が聞こえないくらいなんでもないじゃないかと、三浦がいつてくれるだろうか。大学時代、ボランティア活動をしたことがあるといつていたから、両親がろうあ者と知っても、理解を示してくれるかもしれない。京子は、自分に都合つづのいいように考えようと努めたが、交際が始まって四カ月目に、そうした期待は、あっけなく破られてしまった。

叔父が訪ねてきて、三浦の両親から、破談にしてほしいと、電話があったというのである。

「許せない話なんだが、向こうの母親が、私立探偵たんていに頼んで、こちらのことを調べたらしいんだよ。それで、わかったんだな。家族同士で、つきあっていく自信がないといつていたよ」と、叔父はいつた。

三浦本人からは、翌日、京子の会社のほうに電話があった。

「僕は君が好きなんだから、君の両親にたとえ前科があつたって、平気なんだが、両親が家族同士のつきあいとなると、どうしていいかわからないといってね。僕としても、僕を育てくれた両親を悲しませるのが辛くてね——」

そのあとも、くどくどといい、結局、わかつてほしいと結んで、電話を切ってしまった。

京子には、いいたいことが山ほどあつた。

本当に好きなら、反対する両親と別れてくれればいいじゃないか。彼がそうしてくれたら、私だって、両親を捨ててついでいくのに。

あの男には、本当の勇気がなかったのだと思つた。

君が好きだと、彼はいつた。僕は君と結婚したいんで、君の家族とじゃないともいつた。その言葉が嘘だとは思わないが、それをいつたとき、三浦の頭にろうあ者という言葉はなかったのだ。彼は、きつと、京子の両親が、ろうあ者と知って、狼狽したにちがいない。どうやって、会話をしたらいいのか。両親が反対したら、どうしたらいいのか、親戚だつて困るだろう。

そんなことを考え、結局、安全な道を選んだのだ。

2

その一カ月後、父が車に轢かれて死んだ。

珍しく酔っ払って、夜、車道を歩いていて、車に轢かれたのである。耳の聞こえない父は、車の音にも、クラクションにも気づかなかったのだらうと、いわれた。

だが、京子は、父が自殺したときかと思えなかった。父は酒好きだが、泥酔でいすいしたことは一度もなかったし、酔って車道を歩いていたというのも、奇妙だった。自分が、ろうあ者であることを、強く意識していたから、用心深かった。歩道があるところでは、歩道を歩き、ない道路では、きちんと端はを歩くことにしていた。

（私のせいだ）

と、京子は思った。

娘の結婚話がこわれたのは、自分のせいだと思い、わざと、酔って車道を歩いていたのではないのか。

三浦は、本当の勇気のない男だと、京子は思った。が、考えてみれば、いちばん勇気がなかったのは、自分ではないか。両親が、ろうあ者だということを恥ずかしがり、それを隠そうとした。

三浦に対しても、なぜ、最初から、両親を堂々と紹介しなかったのか。それで話がこわれていたほうが、すっきりしていたのではなかったか。

少なくとも、父が自殺に近い死に方をすることはなかったらう。

母も、父の死後、三カ月して亡くなった。母は、病死だったが、父が亡くなって、生きてい

く氣力を失ってしまったにちがひなかった。母にとって、父は生き甲斐になっていたが、娘の京子は、むしろ辛い存在だったのかもしれない。

母の葬儀のとき、京子は、それを感じた。

京子が、両親のことを真剣に考えはじめたのは、それからだった。

自分が生まれたときから三歳ごろまで、母は写真を撮り、日記をつけていた。写真はよく見ていたが、日記があることは、京子は、今まで知らなかった。たぶん母は、自分たちの苦労話を京子に見せるのは、愛情の押し売りみたいで、嫌だったのだろう。

父や母の遺品を整理していて、その日記も見つけたのである。

京子が生まれたとき、どんなに嬉しかったか、それ以上に、彼女が、ろうあ者でないと知ったときの喜びの大きさ。

ろうあ者の父と母は、赤ん坊だった京子が夜中に泣き出しても、それが聞こえない。今は、ベビー・シグナルのように、赤ん坊の泣き声をマイクで伝え、ランプを点滅させたり、振動にして伝える機械が販売されているが、京子が赤ん坊のころにはそんなものはなかった。だから、二十四時間、赤ん坊の様子を見ていなければならぬので、両親は、交代で一晩じゅう、起きていたという。

また、ろうあ者の自分たちには、声を出して言葉を教えられないので、親戚に頼んで赤ん坊に教えてもらったりしたらしい。

そうした子育ての苦闘が綴られた日記だった。

京子は、その日記を初めて読んだ。

読んだ日は、一日、呆然としていた。ずしりとした重いものが、身体にのしかかってくる感じだった。

後悔が押し寄せてきた。が、どうしたらいいのか、しばらくはわからなかった。

京子が、正式に手話を勉強しようと思い立ったのは、さらに一週間たってからである。もともと子供のころから、両親とは手話で話をしていたので、上達も早かったし、試験は、一回で合格した。

城西福祉事務所の囑託に採用されたのは、六月一日だった。この時期に採用されたのは、二人いた手話通訳士の一人が、病氣のために辞めてしまったからである。

出勤した最初の日に、新しく同僚になった先輩の手話通訳士、林ふみ子が、

「あなたも、病氣には、注意したほうがいいわね」と、いった。

「身体は、丈夫なほうですけど」

と、京子がいうと、ふみ子は小さく頭を振って、

「私のいってるのは、職業病のこと。辞めた奥田さんは、頸肩腕障害になったの。知ってるでしょう？ この病氣のこと」

「いいえ」

「私も、首や腕が少し痛い。奥田さんは、責任感が強くて、ほとんど休みを取らずに、通訳の仕事をしていたし、少しでも正確にと氣をつかったので、ストレスも溜^たまってたんだと思うわ」

と、ふみ子はいった。

ふみ子は、すでに結婚していて、子供もいる。だから、自分が、もし奥田のように、頸肩腕障害にかかってしまったら大変だと、不安げにいった。

「職業病として、まだ、認められていないんですか？」

と、京子はきいてみた。

「東京じゃ、まだ数が少ないし、因果^{いんが}関係が証明されてないということで、認められていないみたいだわ」

と、ふみ子はいう。

京子は、いきなり氣勢^そを削^そがれた感じだったが、それでも、

「私は、若いですから」

「そうね。私は、もう年^{とし}だし、家のことがあって、夜までかかるような仕事はできないから、あなたにがんばってもらうことになるわね」

「大丈夫です」

と、京子はいった。

そんな話をしているとところへ、さっそく、手話通訳の依頼がきた。

城西警察署からだった。

「私が行きます」

と、京子はいった。

3

最初の仕事ということで、興奮と不安が、胸の中で交錯こうさくしていた。

城西警察署に着き、受付で福祉事務所から来たと告げると、すぐ奥へ通されたが、小柄な中年の刑事は、京子の顔を見て、

「大丈夫かね？ あんたで」

と、不遠慮ふえんりょにいった。

京子は、むっとしながら、

「ちゃんと、試験は通っています」

「しかし、経験は、なさそうだね」

「今日が、初めての仕事ですわ」

「そうだろうね。なんとも頼りなさそうだからね」

「一生懸命にやりますわ」

「当たり前だよ。まじめにやってもらわなきゃ困る」

と、その刑事はいった。

まるで、頭ごなしに叱られてゐるみたいだった。

刑事は、京子が受付で渡した名刺に眼をやつて、

「小早川さんか」

「小早川京子です。刑事さんの名前も教えてください。お互いに名乗るのが礼儀だと思いますけど」

京子は、腹が立っていたので、つい、きつい調子でいった。

刑事の顔に、苦笑が浮かんだ。笑うと、いかめしさが消えた。

「気の強そうな娘さんだね。私の名前は、亀井だ。亀井刑事」

「亀井さん」

「同僚は、カメさんと呼ぶよ。それで、あんたに、さっそく、仕事をしてもらいたい」

「この部屋の入口に、殺人事件捜査本部と書いてありましたけど——」

「ああ、殺人でね。容疑者を引っ張ってきたんだが、これが、耳が聞こえなくて、往生して
るんだよ」

と、亀井刑事はいい、京子を取調室へ連れていった。

殺人事件の容疑者ということで、京子は、恐ろしい顔をした大男を、ふと想像してしまったが、その取調室にいたのは、小柄な六十歳ぐらいの女だった。

机の上には、いろいろな言葉を書き殴ったメモ用紙が、散乱していた。

女と向かい合っていた若い刑事が、そのメモ用紙を片づけながら、

「駄目ですよ。この女は、字が読めないんじゃないやありませんか」

と、いまいましげにいった。

「どうなの？」

亀井刑事が、突然、京子にきいた。一瞬、何をきかれたのかわからなくて、

「なんのことですか？」

「耳の聞こえない人は、専門の学校に行くんだらう？」

「ろうあ学校のことですか？」

「ああ。学校へ行っているんなら、字は読めると思うんだが、この女は、筆談にもまったく返事をしないんだよ。無理にボールペンを持たせても、何も書こうとしないんだ」

「この人は、いくつなんですか？」

京子は、改めて、小柄な女に眼をやった。一五〇センチそこそこだろう。背を丸めているので、いっそう、小さく見える。服は地味で、指には何もつけていないが、これは、警察で保管